慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	A・シュッツにおけるフッサール哲学の意義 : "自然的態度の構成的現象学"とは何か
Sub Title	Bemerkungen uber die in der Lehre von A. Schutz bestehende Husserls Philosophie : Die "Konstitutive Phanomenologie der naturlichen Einstellung" von A. Schutz
Author	吉沢, 夏子(Yoshizawa, Natsuko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1982
Jtitle	哲學 No.74 (1982. 5) ,p.131- 153
JaLC DOI	
Abstract	Das Thema von Schutz findet sich in der "konstitutiven Phanomenologie der naturlichen Einstellung", auf die die Sozial wissenschaften gegrundet sind. Das ist eine Wesenslehre, die die Sozialwissenschaften zur Voraussetzung haben. So beabsichtigter in der Lehre - 1. die Fruchte der Husserls Phanomenologie aufs Gebiet der Sozialwissenschaften anzuwenden, mit Hilfe von der phanomenologischen Analyse, 2. die "Ontologie der Lebenswelt" zu entwickeln, die ihm die Erklarung von der wesentlichen Struktur der sozialen Welt bedeutet, 3. nach der den Sozialwissenschaften eigentumlichen Methodologie zu forschen. Husserls Phanomenologie hat zwar einen grossen Einfluss auf Schutz, aber es gibt einen grossen Unterschied zwischcn Husserl und Schutz - zwischen der transzendentalen Philosophie von Husserl und der Lehre von Schutz (der konstitutiven Phanomenologie der naturlichen Einstellung). Schutz entwickelt gerade deshalb die Ontologie in der weltlichen Intersubjektivitat, weil die "Ontologie der Lebenswelt" von Husserl einen grossen Einfluss auf ihn hat, und weil die "Abhandlung uber Galilei" ihn besonders von Eigentumlichkeit der Sozialwissenschaften im Vergleich zu den Naturwissenschaften uberzeugt. Seine Leistungen sind in der Tat philosophisch und zugleich soziologisch. Seine Leistungen aus dem soziologischen Gebiete zu entfernen wurde jedoch gegen seinen eigenen Willen sein. Namentlich nach der Methode der "Deskription" erortert er die "konstitutiven Phanomenologie der naturlichen Einstellung" ausfuhrlich, um die Sozialwissenschaftler daruber zu belehren, dass diese Lehre den Sozialwissenschaften unentbehrlich ist. Uns scheint es, dass er also ein sonderbarer Forscher in der Geschichte der Sozialwissenschaften ware.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000074-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

A・シュッツにおける フッサール哲学の意義

——"自然的態度の構成的現象学"とは何か——

吉　沢　夏　子*

Bemerkungen über die in der Lehre von A. Schütz bestehende Husserls Philosophie

——Die „Konstitutive Phänomenologie der natürlichen Einstellung" von A. Schütz——

Natsuko Yoshizawa

Das Thema von Schütz findet sich in der „konstitutiven Phänomenologie der natürlichen Einstellung", auf die die Sozial wissenschaften gegründet sind. Das ist eine Wesenslehre, die die Sozialwissenschaften zur Voraussetzung haben. So beabsichtigt er in der Lehre — 1. die Früchte der Husserls Phänomenologie aufs Gebiet der Sozialwissenschaften anzuwenden, mit Hilfe von der phänomenologischen Analyse, 2. die „Ontologie der Lebenswelt" zu entwickeln, die ihm die Erklärung von der wesentlichen Struktur der sozialen Welt bedeutet, 3. nach der den Sozialwissenschaften eigentümlichen Methodologie zu forschen.

Husserls Phänomenologie hat zwar einen großen Einfluß auf Schütz, aber es gibt einen großen Unterschied zwischcn Husserl und Schütz — zwischen der transzendentalen Philosophie von Husserl und der Lehre von Schütz (der konstitutiven Phänomenologie der natürlichen Einstellung).

Schütz entwickelt gerade deshalb die Ontologie in der weltlichen Intersubjektivität, weil die „Ontologie der Lebenswelt" von Husserl einen großen Einfluß auf ihn hat, und weil die „Abhandlung über Galilei" ihn besonders von Eigentümlichkeit der Sozialwissenschaften im Vergleich zu den Naturwissenschaften überzeugt.

Seine Leistungen sind in der Tat philosophisch und zugleich soziologisch. Seine Leistungen aus dem soziologischen Gebiete zu entfernen würde jedoch gegen seinen eigenen Willen sein. Namentlich nach der Methode der „Deskription" erörtert er die „konstitutiven Phänomenologie der natürlichen Einstellung" ausführlich, um die Sozialwissenschaftler darüber zu belehren, daß diese Lehre den Sozialwissenschaften unentbehrlich ist. Uns scheint es, daß er also ein sonderbarer Forscher in der Geschichte der Sozialwissenschaften wäre.

* 慶應義塾大学社会学研究科博士課程社会学専攻

1 序　言

現象学的社会学がどのようなものであり，学史上にどのような位置づけをされるものであるかについては未だ見解の一致をみていない．ただ現在現象学的社会学とよばれているものが多かれ少なかれA・シュッツの仕事にその出発点をみいだしていること，そしてシュッツがE・フッサールの現象学にその学的営為の根をもっていることに関しては異論がないといえる．

しかしシュッツの仕事にとってフッサール哲学がいったいいかなる意味をもっているのかについては必ずしも明らかになっていない[(1)]．シュッツはフッサールをどのように理解していたのだろうか．そしてそれはシュッツ自身の研究活動とどうつながっているのだろうか．なぜシュッツはあれほどにまで〝社会科学の基礎づけ〟の問題に強くかかわっていたのだろうか．これらの問いに答えようとする試みは，現象学的社会学とは何か，という根本的な問題を考えていくうえでひとつの大きな示唆を与えてくれるに違いない．シュッツにおけるフッサール哲学の意義を明らかにすることは，そのまま社会科学におけるシュッツの存在意義を問うことにつながると考えられるからである．

本稿ではこのような関心に導かれ，主にシュッツの著作の中にみられるフッサールに関する叙述を手がかりにしながら，シュッツとフッサールを結ぶ線の一端を明らかにし，シュッツの仕事の真の意味を探っていきたいと思う．

以下，まずシュッツが社会科学の基礎づけの学として定めた〝自然的態度の構成的現象学〟とフッサール現象学における〝自然的態度の構成的現象学〟の相違点を明確にし．シュッツの基礎づけの学が彼独自の学であることを示す(2節)．次に彼がなぜそのような独自の学を掲げそれを展開したのかについて，それをシュッツが〝間主観性〟と〝科学方法論の問題〟を，フッサールとの関係でどのように捉えていたかを辿ることによって明らか

にする（3節，4節）．そして最後に以上のことを踏まえたうえで，通常シュッツの科学方法論とよばれているものがいったいどのようなものであるのか，シュッツの仕事の意図がどこにあったのかについて，私なりにひとつの結論を導きたい（5節，6節）．

2 〝自然的態度の構成的現象学〟

シュッツは1932年の著作『社会的世界の意味構造』[2]の中ですでに〝自然的態度の構成的現象学〟ということばを使っている．『意味構造』はシュッツの生前に刊行された唯一の著作であり，その後の彼の学的営為の枠ぐみを決定したという点で大きな意味をもつものである．まずここでは『意味構造』の構成と内容を簡単に辿りながら，32年の時点でシュッツが〝自然的態度の構成的現象学〟をどのように捉えていたかを明らかにしよう．

シュッツはこの著作でM・ヴェーバーの理解社会学の方法をより完璧に定式化しようという意図をもって，彼の基本概念の曖昧さを例証しそのひとつひとつを明確に再定義しようと試みている．シュッツにとってこのヴェーバーの基本概念の明確化という仕事は理解社会学のすべての営みの始まりにおかれる〝基礎づけ〟の意味をもつものであった．第1章ではまず予備的考察としてそのような基本概念――〝意味ある行為〟，〝動機的理解〟，〝主観的意味〟と〝客観的意味〟，〝行為に付与された意味〟など――の批判的紹介がなされている．そしてこの第1章の末尾に注釈として付加されている文章の中にはじめて〝自然的態度の構成的現象学〟ということばが現われる．シュッツはここで自らの研究の哲学的側面をはっきりさせるために，まず内的時間意識の現象について明確な理解を得るという目的に必要な限りにおいてのみ現象学的還元内での分析が行われること，その分析の成果は自然的態度の領域内でも通用すること，また〝現象学的心理学者〟としては社会の不変で唯一のアプリオリな構造の分析が求められて

いること，を明示する．そして次のように述べる．「現象学的還元がなされたあとではじめて明らかになる超越論的主観性および間主観性の問題はさておいて，私たちは〝自然的態度の構成的現象学〟としてあの〝現象学的心理学〟を推し進める．それはフッサールによれば最終的に純粋な間主観性の心理学でありそれ以外の何ものでもない[(3)]．」

こうしてシュッツは第2章で閉じられた超越論的主体としての私から出発しその意識の内の意味形成の過程を分析する．これはこの本の展開には必要かつ不可欠な部分といえる．シュッツにとって〝行為〟や〝意味〟という概念はそもそも私の〝反省〟という作用からすべて発生するものだからである．第3章では他者も第2章で分析された私の意識の構造とおそらく同じものをもつであろうとい前提の下に他者理解の過程を克明に追い，第4章ではこの他者との関係をめぐって私を中心に重層化されている社会的世界の構造の記述へと移っていく．シュッツは〝反省〟の作用による自己解釈の理論を基礎に他者理解のメカニズムを分析し，〝理解〟の概念が対面的状況から匿名的世界に至るまで，私と他者のおかれる時間的空間的世界の変化に従って異なることを明らかにした．こうすることによってシュッツは理解社会学の〝理解〟がどのようなものであるかをはっきりさせようとしたのである．そして第5章では前章までの叙述を踏まえて理解社会学の方法の再吟味を行い，さらなる問題点を挙げている．

以上のような『意味構造』の構成からもわかるように，シュッツの〝自然的態度の構成的現象学〟には二つのレベルが認められる．超越論的主体の内的時間意識の流れの本質構造の解明と，他者存在を自明とし相互行為を行いながら自然的態度のうちに生きる実践的主体を対象とする存在論である．前者はいうまでもなく超越論的哲学の仕事であり現象学的還元内で行われる．シュッツはフッサールの業績に依拠しながら自ら厳密な現象学的態度をとることをはっきり意識している．しかしシュッツの〝自然的態度の構成的現象学〟の重点は後者の存在論の展開にある．前者の分析はそ

のために必要な限りで触れられるにすぎない．つまり第2章は第3，4章の展開のために最低限必要な前提なのである．シュッツの〝基礎づけ〟の意図が理解社会学の基本概念の明確化にある以上，それら諸概念が発生してくるそもそもの地盤，つまり私の意識の流れにまで遡って考察することがどうしても必要だったわけである．しかしシュッツはそれにあまり深入りすることは好まず，あくまで自然的観点からこの世界を眺めようとする．〝自然的態度の〟ということばは超越論的主体よりこの世界に素朴に生きている実践的主体に焦点をあわせるという彼の姿勢を表わすものである．

シュッツは〝自然的態度の構成的現象学〟ということばをフッサールの著作の中から採っているが，両者の使い方には違いがある[4]．シュッツが引用するのは[5]『イデーンへのあとがき』であるが，そこには次のように述べられている．「純粋な内観心理学，つまり志向性の真の心理学（それはもちろん最終的には純粋な間主観性の心理学であるが）は全く自然的態度の構成的現象学であることがわかる[6]．」「正しく遂行された現象学的心理学と超越論的現象学の間にはひとつの注意すべき貫通的な平行関係がある[7]．」

フッサールは当初から事実学を基礎づける本質学の構想をいだいていた．そして構成的現象学から発生的現象学への展開をみせる後期においては，実証的な心理学との批判的対決を通して現象学的心理学をうちたてようとしたが，これは超越論的哲学へと完成されるべきものであった．ここでフッサールのいう〝自然的態度の構成的現象学〟とは心理学を真に基礎づける現象学的心理学(純粋心理学)として提起されたものに他ならない．フッサールはシュッツの〝自然的態度の構成的現象学〟の二つのレベルの後者に関しては，別の独自な学の主題となり得る可能性を示唆しているにすぎない．フッサールの関心はあくまで精神の学としての超越論的哲学の完成にあった．フッサールが「心理学から現象学的な超越論的哲学への道」を模索したのも，別の独自な学の主題，つまり「生活世界の存在論」を提

起したのも，彼の最晩年の著作『危機書』[8][9]の中でである．したがって『意味構造』の時点でシュッツはこのフッサールのいう〝自然的態度の構成的現象学〟が最終的に超越論的哲学と軌を一にするものであるという『危機書』での見通しを知ることはできなかった．シュッツは〝自然的態度の構成的現象学〟が社会のアプリオリな構造を問うものである以上，彼の企図した理解社会学の基礎づけの学としての役わりを果たすものであると考えたのである．

しかしシュッツは彼自身の卓越したフッサール研究の成果から，後期フッサールにおいてその展開をみる「生活世界」の概念については，その重要性を32年の時点ですでにある程度まで読みとっていたと考えられる．それは〝基礎づけ〟の主要な仕事を存在論の展開に定めたこと，またフッサールの後期の思想に触れてから書かれた40年以降の諸論文の中で『危機書』への言及が重要な役わりを果たしていることからも十分に推察できる．

「生活世界の存在論」についてフッサールは次のように述べている．「世界とは，空間時間性という世界形式において二重の意味でその〝位置を〟（空間的位置，時間的位置にしたがって）定められている諸事物，つまり空間時間的〝存在者〟の総体である．ゆえにここにこれらの存在者の具体的に普遍的な本質学という意味での，ひとつの生活世界的存在論の課題があるといってよいだろう．[11]」「しかしこれらすべて（筆者注・生活世界）の中にはひとつの確固とした型が支配している．それはすでに述べたように方法的には純粋なアプリオリとして包括され得る本質的な型である．（中略）これらの本質的な型はもともとあらゆる超越論的関心なしに，ゆえに〝自然的態度〟（超越論的哲学のことばでいえばエポケー以前の素朴な態度）において，ある独自な学――つまり純粋に経験世界としての生活世界の存在論の主題となり得たであろう．[12]」

フッサールはこのように，超越論的哲学とは別に「生活世界の存在論」

という学が成立可能であること，そしてもしそのような学があったならその主題は生活世界に固有な本質的型であることを示唆している．シュッツはこれをうけてフッサールが提起したにとどまった「生活世界の存在論」を自己の学的営為の中心におき[13]，それを社会的世界における類型論として展開するのである[14]．

以上のように，シュッツはまずヴェーバーの基本概念の明確化をめざし〝自然的態度の構成的現象学〟をたてる．それは彼のフッサール研究と豊富な現象学的知見にもとづく一種の本質学であり，あくまで実践的主体を対象とする存在論を中心に，必要な限りで超越論的主体の意識の分析をも含むものである．この時点でシュッツは「生活世界」の概念の重要性に気づいていたが，後に後期フッサールの思想，特に『危機書』での展開を知るにおよびさらに確信を深め，〝自然的態度の構成的現象学〟を社会科学を真に基礎づける学としてはっきりと位置づけるに至る．そしてシュッツによれば，この基礎づけの学のひとつの主要な仕事はあらゆる意味現象を現世的間主観性のレベルで記述分析するためのその特殊な方法を明らかにすることにある[15]．

3 〝間主観性〟の問題

シュッツは「経験的社会科学はその真の基礎を超越論的現象学にではなく，自然的態度の構成的現象学にみいだすだろう（傍点筆者）」と述べている[16]．フッサールの現象学はその根本においていわゆる科学一般の基礎づけの意図を含んでいるといえる．ではなぜシュッツは自らの学的営為を超越論的現象学と区別し，社会科学の基礎を〝自然的態度の構成的現象学〟という彼独自の学に求めたのだろうか．

そのひとつの大きな理由は，シュッツが現象学は〝間主観性〟の問題を解決していないと考えていた点にある．シュッツは〝間主観性〟の問題——いかにして他我認識は可能か——に大きな関心をもっていた．社会科学

は人格を扱う科学であるから，もし現象学が〝間主観性〟の問題に解決を与えることができるならその基礎づけの意味は決定的になる．私がいて，私と同じような身体と意識の構造をもった他者たちがいることを，社会科学者たちは疑わない．社会科学にとって他者存在は自明であり，それを前提としてすべてが始まるのである．しかしシュッツのようにあらゆる社会科学の始まりにおかれる〝基礎づけ〟の学を遂行しようとする者にとっては，この問題を避けて通ることはできない．〝理解〟という概念ひとつとってみても，もし他我認識の問題に哲学的解明が与えられていれば，シュッツの望むより明確な再定義の助けになるにちがいないからである．ゆえにシュッツはフッサールのみならずさまざまな哲学者たち——シェーラー，メルロ＝ポンティ，オルテガ，サルトル——がこの〝間主観性〟の問題をどのように扱っているかに言及し検討を加えている[17]．しかしシュッツは結局〝間主観性〟の問題は哲学的に解決されていない，という結論を導かざるを得なかった．フッサールについても，「超越論的間主観性の問題を超越論的自我の構成作用から説明するというフッサールの試みは成功しなかった[18]」という判断を下している．

〝間主観性〟の問題は現象学の最大の弱点であると同時に，現象学に依拠して社会科学の基礎づけを行おうとしたシュッツにとってもまた唯一弱味であったといえる．しかしシュッツは次のようにいう．「この問題がいかなる現象学的探究にとっても中心的なものとして残されていようと，それがこれまで満足のいく解決をみいだしていないという事実は，社会科学の基礎づけに対するフッサールの顕著な重要性を損うものではない．なぜならこれらの科学は間主観性の哲学的側面ではなく，自然的態度における人々によって，つまり社会的文化的世界に生みこまれ，その世界の中に意味をみいだし，その世界と何とかうまくやっていかねばならないそういった人々によって経験されるものとしての生活世界の構造を扱わねばならないからである[19]．」

現象学が独我論を克服していようがいまいが．私たちが他者たちとともこの世界に生きていることはさしあたって疑い得ないことである．ゆえにシュッツはさしあたって他者存在の自明性を所与のものとして，それを問うことはせず，「間主観性の哲学的側面」は超越論的現象学にまかせる形をとったのである．そしてシュッツは生活世界のアプリオリな構造を解明する存在論を展開していくことによって，社会科学の基礎である間主観性の問題をあくまで〝自然的態度の構成的現象学〟の中で考えていこうとしたのである．

このようにシュッツは超越論的現象学とは一線を画し〝自然的態度の構成的現象学〟を推し進めることになる．しかし彼の基礎づけの仕事の出発点は〝私〟（自我—自身）であり，その意識の流れの分析は存在論の展開にとって不可欠な前提である．シュッツは超越論的現象学と一線を画しながらも，その現象学的分析の諸成果を〝自然的態度の構成的現象学〟の中で応用していかねばならなかったのである．だからこそシュッツは，社会科学に対するフッサールの顕著な貢献は，現象学的に還元された領域で行われた分析の成果が自然的態度の領域にも妥当するという原理を確立した点にある[20]と，繰り返し強調する必要があったのである．この指摘は自然的態度での仕事に従事しようとする者にとって非常に重要な意味をもっている．シュッツは現象学的還元の意味を正しく把握する[21]ことによって，フッサールの行った諸分析の成果[22]を社会科学の基礎づけにとり入れることの根拠を得たのである．社会科学における具体的な問題を現象学的方法で分析することが問題なのではない．しかしシュッツは「社会科学の方法やその基本的概念に関する将来の研究は，必然的に現象学的探究の領域に属する問題につながる[23]」という．社会科学と現象学を結ぶ線は，現象学的還元の意味を正しく理解することによって可能となるのである．

4　社会科学における〝ガリレイ論〟

シュッツの〝自然的態度の構成的現象学〟は最終的には社会科学に固有の方法論の創出をめざしている．シュッツは自然科学の方法——つまり数学的科学としてもっとも進んでいる物理学の方法——が唯一絶対のものであるという考え方を斥ける．シュッツにとっての大きな関心は，科学的知識はいったいいかにして可能か，そしてまたその論理的方法論的前提は何か，といったことであり，自然科学の方法論的問題も以上のような包括的で根本的な問題の一部にすぎないのである．シュッツは〝自然的態度の構成的現象学〟において，科学的知識や方法論を可能にする前提を問い続けてきたのであり，彼自身そのような問いかけが「社会的現実を把握するために社会科学によって展開された特殊な方法論的道具だては，自然科学のそれよりもすべての人間の知識を支配する一般的原理の発見に通じることを明らかにする[24]」と確信していたのである．シュッツがこのように自然科学との対比において，社会科学に固有の方法論の展開をめざした背景には，『危機書』第9節「ガリレイの自然の数学化」の影響が強いと考えられる．ここではシュッツの仕事の中に読みとれる〝ガリレイ論〟の影響を跡づけ，それがシュッツを解釈するうえでどのような意味をもっているのかという点について明らかにしたい．

まず予備的な考察としてフッサールの〝ガリレイ論〟について若干の説明をしておきたい．フッサールは19世紀後半に支配的となった実証科学の繁栄による世界観の偏向，つまり客観主義的偏向に批判の眼を向ける．学問の真理とは，現代の実証科学を方法論的に支配している客観性のことであり，このような実証主義的な傾向は，人間にとって決定的な意味をもつ問題，つまり世界と世界に生きる人間の存在がいかなる根源的意味をもち得るかについて考えることのない単なる実証主義的人間をつくりだした．私たちは今や「生」の問題に無関心な人間に堕し，ルネサンス以来人間性

の再建に対して指導的な意味さえもっていた学問も実証主義的に偏向するに至っている．フッサールによれば，学問の〝危機〟とは学問がこの「生」に対する有意義性から遊離したことにある．そしてこのような〝危機〟が現われたのは，そもそも諸科学が構成される基底となる世界，学問をその根底から支え常に新しい生命を吹きこみ活性化させる前科学的生活世界との基本的関係の洞察が見失われてしまったからである．どんな学問でもはじめは素朴で日常的な生活世界に基づいて構成される．フッサールは測定術の問題に着眼して，純粋に理念的なものの学である純粋幾何学が，もともと生活世界を地盤とする「純粋思考の理想的実践」に他ならないことを明らかにした．しかしいったん構成された学問の成果は，伝統としてその意味の基底である生活世界的根源への遡行とは無関係に受けつがれていく．そしてやがて科学によってつくりだされた理想型が生活世界的類型にとってかわるように，理想化された自然が学以前の直観的自然とすりかえられるようになってしまったのである．ガリレイでさえ，理想化という作業が幾何学以前の生活世界とその実践的な技術を基底として生じてくる仕方に眼を向けようとすることなど思いも及ばなかった．しかもガリレイの近代物理学の根本思想には，具体的な世界全体は数学化し得る客観的世界であるという考え方があった．幾何学は応用幾何学へ，つまり純粋数学は応用数学へと発展し，その発展の上にガリレイは自然の数学化によって——本来は数学化し得ない生活世界の内実を捨象するか，あるいは形式といっしょに数学化するという歪んだかたちで——近代物理学を成立せしめたのである．そしてさらにその発展の上に総じて近代自然科学が築かれてきたのである．この近代自然科学の自然とはもはや生活世界的自然ではない．ガリレイと同時にすでに理想化された自然と生活世界的自然のすりかえが始まっていたのである．

フッサールはこのように自然科学の自然が生活世界的自然ではないことを暴露し，彼の究極の目的である精神科学の基礎づけの問題を際立たせよ

うとしている．シュッツもフッサールと同じ関心のもとに，しかし彼の場合は特に社会科学に重点をおいて基礎づけの問題を考えているのである．

シュッツは科学者の態度と社会科学の方法の関係について次のようにいう．[25]「この生活世界を科学的に観察しようと決心することは，もはやこの世界の中心として自分の場所や自身の関心の状態を定めようとするのではなく，生活世界の現実の方向づけのために別のゼロ項を代用させることを意味する．」「方向づけの枠ぐみに別のゼロ項を代用させるとともに，素朴な人間にとっては自明であったあらゆる意味連関は，他ならぬ彼自身との関連において今や基本的な特殊な変容をうけている．社会科学や文化科学にとっては，それに固有のそのような変容の類型を展開すること，つまりその特殊な方法をつくりだすことが残されている．いいかえればこれら科学は生活世界の現象が理想化の過程によって変容されるようになることについてのその変容の方程式を与えねばならないのだ」「なぜなら理想化や定式化は，フッサールが自然科学について述べた役わりと全く同じ役わりを，社会科学に対して果たすからである．ただしそれが形式の数学化の問題ではなく，〝内実〟の類型学の展開の問題であるという点を除いて．」

生活世界に素朴に生きている私たちはまず何よりもこの世界に実践的関心をもっている．しかし私たちはそのような実践的主体であると同時に超越論的主体でもあるので，いつでも反省という作用によって意味の過程を活性化させることができる．ただ私たちはそのことを自覚していないだけである．つまり「依然としてこの世界の〝ゼロ項〟である」ことにかわりはないのである．それに対して科学者たらんと欲することは，今まで自分自身の世界の中心であった〝ゼロ項〟を，その学問的関心によって選ばれた問題状況に即した別の〝ゼロ項〟とおきかえることを意味する．この別の〝ゼロ項〟の代用とは科学者にとって必要ないわば科学的態度への全面的態度変更の習慣化を意味している．私たちはいつでも科学的態度をとることはできるし，また事実とっていることもあるが，そのような態度変更

は実践的関心によって常に自分の〝ゼロ項〟にひきもどされる．だから科学者はその態度変更を習慣化せねばならないのである．つまり科学者も「その科学的仕事の中で常に彼自身の生活世界と関係しているし，また関係することを余儀なくされる」のであるが，「ある程度まで志向性の生き生きした流れからは離れて」いるのである．科学者は，彼自身が生活世界に生きる人間であるという事実は何らかわらないが，科学を続けている間は彼が自ら選んだ科学的態度をとり続けるように要請されているのである．そしてこのように科学的態度をとり続けている科学者にとって生活世界のあらゆる意味連関は「他ならぬ彼自身との関連において」ある種の基本的変容をうける．つまり科学者がひとつの〝ゼロ項〟を別の〝ゼロ項〟におきかえることによって，彼自身の生活世界は理想化をうけ類型的に変容されるのである．シュッツによればこの変容の方程式を与えることが社会科学に残されていることなのである．

シュッツはこうして生活世界に素朴に生きている人と科学を続けている人が生活世界とどのようにかかわっているかを記述することによって，科学者の態度と科学の方法が密接な関係にあることを示した．しかしシュッツがこのように述べることによって意図していたことにはもっと深い含意がある．彼はフッサールが『危機書』の中で展開した〝ガリレイ論〟を社会科学の分野で展開することの重要性を認識し，自らその第一歩を踏みだしているのである．

すでに述べたように，自然科学者たちが何の疑いもなくうけ入れてきた自然は．実はガリレイが数学化した自然，つまり理想化された自然であって生活世界的自然ではなかった．しかもガリレイは生活世界における内実を捨象するか，あるいは形式といっしょに理想化してしまった．フッサールはガリレイの理想化のこの歪みを指摘することによって，自然科学の客観的真理が「理念の衣」にすぎないことを暴露した．ガリレイ以来のめざましい自然科学の成果は疑うべくもないが，しかし究極的に精神の学の樹

立をめざすフッサールは，精神科学においてはそう簡単にはいかないのだ，ということを示したかったのである．

そしてシュッツはこのフッサールの考え方をうけつぎ，社会科学が自然科学の方法に依拠せねばならない根拠はどこにもないという確信を得る．シュッツはまず比喩的に，自然科学の営みが生活世界の形式を数学化していく過程であるなら，社会科学の営みとは生活世界の内実（Füllen）を類型学として展開していく過程に他ならないと考える．そしてシュッツにとって社会科学におけるガリレイはM・ヴェーバーである．シュッツはヴェーバーの理念型およびその法則の理論を社会科学の方法の型を特徴づけるものとして高く評価している．しかし数学の公式がその当初の意味形成の地盤，つまり生活世界から切り離されひとり歩きをするように，類型学もまたそれが人格という高度に複雑な内容を扱うだけに，単なる方法を実在だと思いこませ生活世界の豊かな内容を忘れさせるという危険を常に孕んでいるわけである．ヴェーバーの方法論をこの意味形成の地盤にひきもどすこと，それがシュッツの基礎づけの仕事に他ならない．そしてシュッツはこの仕事を，ヴェーバーの方法や基本概念がいわば機械的に無批判に踏襲されてきたことに対し，科学者たちに反省の眼を向けさせることが重要であるという考えの下に，科学者なら誰でもが無意識のうちに行っている手続きを改めて明らかにすることから始めているのである．科学者が研究のさいにある種の科学的態度をとるのは当然のことで，誰でも自分自身の〝ゼロ項〟を別の〝ゼロ項〟におきかえるという態度変更を行っている．しかしそれはほとんど無自覚に行われる手続きであって，科学者自身が明確に意識しているわけではない．私たちはこのような手続きや方法や専門分野で使われる概念などを何の疑いもなくうけついで使用している．自然科学者たちが，自分たちの対象としている自然がガリレイによって数学化されたものであることなどに思いも及ばないように，社会科学者たちも自分たちが対象とする社会が生活世界を地盤としてすでに理念化されたもの

であることに気づかない．そして〝理解〟〝意味〟〝行為〟などの概念が生活世界からどのように生じてくるのかに眼を向けることもないのである．シュッツは科学者ひとりひとりにまずこのことを自覚させることが，彼の基礎づけの学の最終目標である社会科学に固有の方法論創出のための第一歩となると考えたのである．

5　シュッツの〝社会科学方法論〟とは何か

さて以上のような論述を踏まえたうえで，つまりシュッツの中にみられるフッサール哲学の影響を探るという本稿の一貫した視点から，通常シュッツの〝社会科学方法論〟とよばれているものを眺めてみると，これは前節で述べた社会科学における〝ガリレイ論〟の一端であると読むことができる．たとえばシュッツは主観的解釈の公準について，「一方で常識的構成体である第一次構成体〔＝社会的世界〕は主観的要素，つまり行為者自身の視点からその行為を理解することを含んでいるのは明らかであるから，もし社会科学がほんとうに社会的現実を説明しようとするならば，第二次の科学的構成体もその行為が行為者に対してもつ主観的意味との関係を含まねばならない」と説明したあとで，「これがM・ヴェーバーがその有名な主観的解釈の公準で理解したところのものであり，そしてそれはこれまであらゆる社会科学の理論構成のさいに確かに行われてきたことであると私は思う（傍点筆者）」と述べているのである[26]．つまりシュッツが第一次構成体から第二次構成体を導く手続きとして挙げるさまざまな公準は，シュッツ自身が新しく方法論として展開しているというよりも，すでに社会科学者たちの間で行われてきた方法を改めて明らかにしたものであるという性格の方が強いと思われる．客観性の公準――科学者は科学者になろうと決心することによってその個人誌的状況を科学的状況におきかえるのだが，その科学的状況がいかなるものであるかは，単に全く個人的なものではなく，それぞれの科学の現実の状態によって決まるのであり，その解

決もその科学を支配している手続き規則にしたがって達成されるということ[27]——もシュッツのヴェーバー解釈であり，論理一貫性の公準も適合性の公準も，いわば科学者にとってはあらためていわれるまでもないあたりまえの，常に行っている手続き，あるいはあたりまえのこととして行われていた手続きをもう一度はっきりと明文化しようとしたものなのである．シュッツが適合性の公準について「人間行為についての科学的モデルの用語はすべて類型的構成によって示されるような仕方で，個々の行為によって生活世界内で遂行される人間の行為が，行為者自身にとってもまた仲間たちにとっても，日常生活の常識的解釈によって理解可能なものであるように構成されねばならない[28]」というとき，このことはまず何よりも，科学的モデルの用語が由来しているのは第一次構成体でありそれ以外のものではないということを意味しているのである．シュッツが社会科学の基礎づけの学として社会的世界の存在論を展開しているのは，まさにこの第一次構成体自体の本質構造を問うためであった．そしてその一環として，社会科学のあらゆる概念や方法がこの第一次構成体である社会的世界から生じてくるその仕方に眼を向けることの重要性を訴えることが含まれているのである．そうだとすれば適合性の公準は，科学的モデルの用語が本来どこから生じてくるのかを科学者たちに気づかせるという役わりを果たしているのである．

シュッツはたとえば〝理解〟という概念についても，まず第一次構成体の中でそれがもつ意味と関連性の体系を明らかにしたうえで，第二次構成体における理解——つまり科学的理解——がどのようなものであるかを明らかにしていく．このようなシュッツの論の進め方は至るところにみられる．科学者の態度を論じるさいにも，科学者が生活世界に素朴に生きている人間であることを忘れずに，まず両者の関係を明確にすることから始めている．彼は必ず第一次構成体，つまり社会的世界を問うことから出発しているのである．

シュッツの〝社会科学方法論〟とよばれているものを，このようなシュッツの仕事全体の流れに位置づけてみた場合，それは社会科学において自明とされている社会的世界を問うという存在論の一環として捉えることができるのである.[29]

6 結　　語

シュッツの中にフッサールの影響を辿るという本稿の試みも終わりに近づいた．最後に若干のまとめを行い，以上の論述から必然的に導きだされるひとつのシュッツ像を呈示して稿を閉じたいと思う.

シュッツはまず現象学的還元という現象学のもっとも基本的でかつもっとも重要な方法的態度の意味を正しく把握し，フッサールの諸分析の成果が社会科学の分野で実り豊かに応用され得る根拠を得た．超越論的レベルでの分析を自らも行ったシュッツにとって，還元された領域での分析，研究の成果が自然的態度の領域にも妥当するという原理は，現象学と社会科学を結ぶ重要な生命線であった.

さらにシュッツは〝間主観性〟の問題にとりくむ．はたして独我論は克服できるのか．他我や，人と人との相互作用にもとづくあらゆる社会現象はいったい説明可能であるのか．これらの問題を解こうとする現象学の試みはシュッツにとって大いに魅力的なものであったに違いない．それは社会科学にとっても直接根本的な問題であり，もし哲学的に他我の構成が説明できるなら，人格を扱わねばならない社会科学に非常に大きな示唆を与えることができるからである．しかし結局シュッツは自らの研究の結果，この問題を未解決のまま保留せざるを得なくなった．シュッツが超越論的現象学の成果を十分にうけつぎながらも，社会科学の基礎づけの学として〝自然的態度の構成的現象学〟という独自の学を掲げたひとつの大きな理由がここにあるのである.

しかしシュッツが〝自然的態度の構成的現象学〟を社会科学の基礎づけ

の学としてはっきりと位置づける最大の根拠を得たのはフッサールの『危機書』であった．シュッツはすでに『意味構造』を著した時点で，「生活世界」の概念の重要性に気づいていたが，『危機書』でフッサールが〝生活世界の存在論〟をはっきりと提起していることを知り，おそらく基礎づけの仕事の焦点を存在論の展開にあわせることに大きな自信を得たに違いない．また『危機書』での〝ガリレイ論〟の展開は，シュッツに自然科学に対する社会科学の独自性，社会科学に固有の方法論的装置を創出することの重要性を確認させることになった．

このようにシュッツはフッサール現象学の圧倒的影響の下[30]に，社会科学の基礎づけの学として〝自然的態度の構成的現象学〟という独自の本質学を企図した．それはフッサール現象学の諸分析の成果を応用しながら，シュッツ自身も必要に応じて現象学的分析を行い，社会科学の前提となる社会的世界の本質的でアプリオリな構造を解明する存在論を展開し，最終的には社会科学に固有の方法論的装置の創出をめざすものであった．

そしてこの基礎づけの学はほとんど記述という方法によってなされている．シュッツは科学的理論[31]を構成[32]したのではない．現象学的記述を行ったのだ．しかしシュッツは記述に徹することはできなかった．なぜなら彼は〝自然的態度の構成的現象学〟を推し進めることと同時に，そのような学がなぜ社会科学に必要であるのか，なぜフッサール現象学に依拠するのかといった問題をまず解き明かしていかねばならなかったからである．シュッツの仕事は〝記述しながら，なぜ記述するのかを説明する〟という繰り返しであった．そのことがシュッツを社会科学史上特異な研究者たらしめているのである．そしてこの仕事はそのすぐれた現象学的知見を背景に，自明とされる世界に常に反省の眼を向けようと努力したシュッツだからこそなし得たことであるといえる．もしシュッツの仕事を現象学的社会学とよぶことができるなら，そのもっとも〝現象学的〟な側面とは，社会科学者たちが自明のこととしてうけ入れてきた依ってたつ地盤そのものを問う

というシュッツのこの姿勢にこそあるといえるだろう．現象学的社会学とよばれるものが——少なくともシュッツの仕事が——伝統的社会学と対立したひとつの陣営を成すようなものでないことはもはや明らかである．シュッツは伝統的社会学がすでに行ってきたことの意味を現象学的な手法で明るみにだしたにすぎない．社会科学がこれまで〝何をどのように〟行ってきたかを，社会科学者ひとりひとりがはっきりと認識することなしに社会科学のさらなる展開はあり得ないとシュッツは考えていたのである．現象学的社会学とよばれるものは，自らの依ってたつ地盤を問うという現象学的態度を常に保持しつつ，一方でその学問的実践的関心にもとづく科学的態度をとり続けるような人々によって営まれている筈である．この両方の態度の間で往復運動をくり返すことが何よりも重要なことなのである．しかしよく考えてみればこの往復運動は現象学的社会学者のみに要請されるものではない．それはすべての社会科学者に向けられているものと考えるべきである．シュッツの仕事は，どのような対象領域を選び，どのような方法で研究を進めているかといったことには関係なく，すべての社会科学者にとって同じ重さで意味をもっている．いやむしろ，シュッツを哲学者として，シュッツの仕事を哲学であるとして，社会学の視野から遠ざけてしまおうとする人々にとってこそ大きな意味をもっているといえる．シュッツの仕事は確かにすぐれて哲学的であった．しかしそのような哲学が社会学にとって不可欠であること，つまりメルロ＝ポンティが「解釈をおこなうその瞬間には，社会学者も彼自身，すでに哲学者なのである」[33]というところの真の意味を社会学者たちのあいだに改めて顕在化させることの重要性を訴えることが，彼の基礎づけの仕事のまさに中心的な意図であったといえるからだ．そして彼が，自明の世界に眼を向けよ！と訴えかけることは，ただ社会学者の人間としての反省を促すだけではなく，その社会学者が営む社会学をも最終的に変える力をもつであろう．そうでなければシュッツが社会科学史上にもつ特異な位置の意味もなくなるに違いない．

注

(1) シュッツにおけるフッサール哲学の影響を全く評価しないのがB・ヒンデスである. Hindess, B., "The 'Phenomenological' Sociology of Alfred Schutz," Economy and society, Vol. 1. No. 1. 1972. 彼はシュッツの仕事はフッサール現象学の曲解のうえに成りたっており"現象学的"ではない, それは超越論的現象学の心理学的歪曲であると論断する. 彼の主張が到底容認し難いものであることは以下の論述で明らかになる筈である.

(2) Schütz, A., Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt:Eine Einleitung in die verstehende Soziologie, 1932 Springer(1 Aufl. 1974. Suhrkamp)

(3) idid., S. 56.

(4) 同じく〝自然的態度の〟といっても, フッサールとシュッツとでは, 〝自然的態度についての〟と〝自然的態度での〟というほどの意味の相違が認められる. ただしシュッツの場合, 〝自然的態度での〟とはいっても自らの学を〝構成的現象学〟と称している限り, 少なくとも潜在的には現象学的態度が常に合わせ機能しているものと解すべきであろう.

(5) idid., S. 60. Anm. 62.

(6) Husserl, E., Husserliana Bd. V. Ideen Ⅲ Nachwort S. 158.

(7) ibid., S. 146.

(8) Husserl. E., Husserliana Bd. Ⅳ. 2. Aufl. Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie. 1962. (細谷恒夫訳『ヨーロッパの学問の危機と先験的現象学』中央公論社, 1970)

(9) 「心理学から現象学的な超越論的哲学への道」に関しては, 吉沢伝三郎著『生活世界の現象学——フッサールの危機書の研究』サイエンス社, 1981. §6を参照.

(10) Schutz, A., "Phenomenology aud the soclial sciences," C.P. I pp.118—139. "The problem of transcendental intersubjectivity in Husserl," C. P. Ⅲ. pp.51—91, "Type and eidos in Husserl's late philosophy". C. P. Ⅲ. pp.92—115. "Husserl's importance for the social sciences." C.P. I. pp.140—149.

(11) Husserl, E., Die Krisis, S. 145.

(12) Husserl. E., Die Krisis, S. 176.

(13) この指摘は, 石黒毅「社会学と現象学」『講座・現象学4現象学と人間諸科学』弘文堂, 1980の中にもみられる.

(14) 死後出版された2冊の著作, Reflections on the problem of relevance.

1970、と The structure of the life-world 1975. (ラックマンとの共著)の主題がまさにこの存在論であることからも，シュッツの力点がここにおかれていたことがわかる.

(15) Schutz. A., C.P.Ⅰ. pp. 136—7.

(16) Schutz. A., C.P.Ⅰ. p. 149.

(17) Schutz. A., C.P.Ⅰ. pp. 140—4, C.P.Ⅰ. pp. 150—79.C.P.Ⅰ pp. 180—203.

(18) Schutz. A., C.P.Ⅲ. p. 82.

(19) Schutz. A., C.P.Ⅰ. pp. 144—5.

(20) Schutz. A., C.P.Ⅰ. p. 139. p. 149.

(21) フッサールおよびシュッツが強調するのは，エポケーないしは還元によって生活世界の内容から諸科学およびその成果や技術が消去されてしまうわけではない，ということである.

(22) シュッツはフッサールの行った諸分析の中から，社会科学において特に実り豊かに応用され得るものとして，〝内的時間意識の分析〟，〝「ここ」からと「そこ」からみられた環境についての分析〟，〝間接的呈示の理論〟，〝前述定的経験および諸類型の本性についての分析〟，〝開かれた問題可能性，「私はできる」ということばのさまざまな意味，「形式的実践」の問題についての理論〟などを挙げている. C.P.Ⅰ.pp.145—8.

(23) Schutz. A., C.P.Ⅰ. p. 116.

(24) Schutz. A., C.P.Ⅰ. pp. 65—6. ("Concept and theory formation in the social sciences.")

(25) Schutz. A., C.P.Ⅰ. pp. 137—6. ("Phenomenology and the social sciences.")

(26) Schutz. A., C.P.Ⅰ.P. 62.

(27) このようなシュッツのヴェーバー解釈には，科学的な研究活動ははじめから共同作業であり，それ自体間主観性であるというフッサールの考え方の影響がみられる.

(28) Schutz. A., C.P.Ⅰ.p. 44 ("Common-sense and scientific interpretation of human action.")

(29) 〝自然的態度の構成的現象学〟は確かに〝方法論〟の展開をめざしている. だからたとえば「常識と科学的解釈」という論文を，シュッツ自身が新しい方法論として展開しているものと読むことは可能である. 筆者はそのことを否定しているわけではない. ただすでに何度も強調しているように，筆者の視点からはこのような読み方が可能なのである.

(30) シュッツにおいてフッサール哲学の影響は重要であるというよりは，決定的であるといえる．なぜならシュッツがそもそも社会科学の〝基礎づけ〟の学を企図しようとしたこと，つまり彼の学的営為そのものがフッサールの影響なしにはあり得ないことだからである．シュッツはアメリカに渡ってからアメリカプラグマティズム（ジェームズ，ミード，クーリーなど）の影響をうけたといわれているが，フッサールに比べたらそれは影響などというものではない．M・ナタンソンが『A・シュッツ＝T・パーソンズ往復書簡，社会理論の構成——社会的行為の理論をめぐって——』(W・M・スプロンデル編佐藤嘉一訳，木鐸社， 1980）の中で「《ここの学生たちに現象学を教えようとなんかしないほうがよいよ． どうせかれらはうけいれないんだから！》この忠告はうけ入れられた．フッサールの用語を用いるかわりに，シュッツは，ジェームズ，デューイ，ホワイトヘッド，ミード．クーリー，そしてトマスの諸著作の脈絡のなかで自分の考えを示したのである」(19頁)と述べているように，シュッツにとってアメリカプラグマティズムは，フッサール現象学をアメリカへ媒介するための手段であったと考えられるからである．確かにヴェーバーの影響は強かったであろう．基礎づけようとする対象がなければ，基礎づけ自体の意味もないといえるからだ．しかしシュッツが社会科学の基礎づけの学を遂行しようとするその営為自体に，その学的動機自体に与えた影響という点で，フッサールは決定的意味をもっているのである．

(31) 理論とは，現実を何ほどか説明するために，研究者のがわで設定する枠ぐみのことである．シュッツは現実を説明しようとしたのではなく，現実の本質的構造をあるがままに記述しようとしたのである．もちろんシュッツの仕事がひとつの学である以上それを理論とよんでもさしつかえないが，それは科学的理論というより哲学的理論というべきものであろう．またシュッツの仕事が，あらゆる社会科学の始まりにおかれる〝基礎づけ〟の学であるということを認めるなら，そのような〝基礎づけ〟の学と〝基礎づけられる〟がわの社会科学者たち（たとえばヴェーバーやパーソンズ）の仕事を同列に論じるわけにはいかないのである．

(32) 後期フッサールの用語法では，構成（Konstitution）とは，生活世界的経験としては，すでに自明である事柄をあらためて（現象学的な意味で）理論的に確認することである．〝構成的現象学〟の〝構成的〟とはもちろんこの意味で使われており，現象学的な意味での記述とはこのレベルでのことである．他方，構成（Konstruktion）とは，理想化を通じて数学や科学の理論を構成することである．「シュッツは科学的理論を構成したのではない」とい

うのはこのレベルでのことである.

(33) メルロニポンティ著，竹内芳郎訳，『シーニュⅠ』 p.163.